

学生海外調査研究	
助詞の誤りに対するリキャストとメタ言語フィードバックの認識 —刺激回想インタビューの分析を通して—	
菅生 早千江	国際日本学専攻
期間	2011年9月25日～2011年10月7日
場所	アメリカ ニューヨーク州
施設	ヴァッサー大学

内容報告

1. 背景、研究目的、および意義

外国語を学ぶ学習者の発話の誤りをどのように訂正するかということは、外国語教育に携わる者にとっては日常的な関心事である。同時に、学習者の誤りに対する訂正フィードバックは、言語を習得する上で重要な要因であるインプット、アウトプット、気づき等に関わる研究対象であり、第二言語習得研究の領域で現在活発に議論されているテーマである。

訂正フィードバックを与える方法のうち、学習者の発話の誤りを教師が自然に言い直す手法を「リキャスト」という。リキャストは対象者に対して正用を提示する (**input-providing**) 方法である。一方で、学習者に自己訂正をさせるように (**output-pushing**)、「もう一度言って」など明確化を要求したり、誤り部分を繰り返したり、「動詞は**-te form** ですね」など、メタ言語 (文法用語) を用いる方法もある。どのような誤りに対して、どのフィードバック手法を用いるのが効果的であるかということは、見解の一致を見ておらず、議論が続いている。

日本語を対象とした研究は欧米語を対象とした研究に比べて多くはないが、その中で報告者は、日本語学習者の誤りに対する訂正フィードバック手法と、フィードバックの対象である文法項目の関係について、博士論文のテーマとして研究を続けている。修士論文の一部をまとめた菅生 (2008) では、受益補助動詞 (～てくれる、～てもらおう) を対象とし、補助動詞の欠落に対して付加するためにリキャストした時と、助詞の誤りに対してリキャストした時とでは、対象者の反応が異なることから、助詞にリキャストしても対象者が気づかない可能性があるかと報告した。しかし、実際に気づいていなかったのかどうかは検証していない。

この点を検証することを目的として、報告者は 2010 年、本校の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣プログラム・海外インターンシップ」による研究助成を受け、協定校のヴァッサー大学において、動詞の活用や補助動詞の誤りに対するリキャストと、助詞の誤りに対するリキャストでは認識 (気づいたかどうかに加え、気づいた場合にはどのように受け止めたか) が異なるかどうかを調査した。インタビューコメントの分析を通して、動詞の活用や補助動詞の誤りに対してはリキャストが効果的であるが、助詞にはリキャストで正用を提示したとき、リキャストされたことそのものには気づいても、なぜそれが正しいのか納得しない例が有意に多いことを報告した (菅生、2010a)。対象者は助詞の誤りにリキャストを受けても、「助詞の使い分けは本当に難しい」とコメントしたり、「私は助詞の使い分けについて～～と理解しているので「に」を使ったが、どうして「に」が誤りで「で」なのか理解できない」と述べたりしたのである。これは、学習者の中で、助詞の選択についてルールが不明確であったり、あるいはルールを不正確に構築しているとき、リキャストで助詞の正用を提示しても文法ルールの再構築につながらない可能性を示している。そうであるなら、助詞の誤りにはメタ言語を用いて文法ルールのヒントを与えるフィードバックのほうが効果的なのではないだろうか。そこで、助詞の誤りに対して 2 つの異なるフィードバック手法 (リキャストおよびメタ言語フィードバック) を受けた時に、学習者がどのように認識するかを目的に、本調査を計画した。

研究課題は以下の通りである。

- 1) 助詞の産出を促すタスクにおいて、リキャストとメタ言語フィードバックとでは、学習者の認識は異なるか。
- 2) リキャストとメタ言語フィードバックの認識は、学習者が現在言語化できるメタ言語知識とど

のように関わるか。

日本語を対象とした訂正フィードバック研究で、対象とする項目によってフィードバック手法の認識が異なることを報告しているのは、現在のところ報告者のみである（菅生 2008,2011a,2011b）。対象項目に対する学習者のメタ言語知識とフィードバック手法の認識がどう関わるかという問いは、新規な観点であり検証すべきであると考えられる。また、欧米語を対象とした研究が中心の第二言語習得研究において、日本語のように類型論的に異なる言語を対象としたときに、どのような結果が得られ、どのような第二言語習得の理論で説明するかは、当該領域全体における価値のある報告となる。以上の点において本調査の意義が認められる。

2. 調査概要

2.1 チュートリアルセッションによるインタビュー調査

2.1.1 参加者

本調査の参加者は中級日本語学習者 11 名である。受け入れていただいたヴァッサー大学で、日本学科担当教員の承認のもと、「話す練習を目的とした 1 対 1 のチュートリアルセッション」実施を周知してボランティアを募集し、協力者を得た。

2.1.2 チュートリアルセッションでの活動

セッションでは、アイスブレイキング（緊張ほぐし）および日本語力のチェックも兼ねた簡単なインタビューの後、2 種類のストーリーナレーションタスクを実施した。ストーリーナレーションタスクの詳細は、次節で述べる。1 つ目のタスクは、対象とした項目のメタ言語知識をみるために行った。2 つ目のタスクの際には、参加者の発話中の誤りに対して、リキャストとメタ言語フィードバックを与えた。セッションは参加者の承認を得て録音・録画を行った。

次に、訂正フィードバックを与えたタスク 2 について、録画ビデオを再生し、それを刺激剤として対象者に「訂正フィードバックを受けた場面で何を考えていたか」を英語で語ってもらう刺激回想法によるインタビューを、Mackey, Gass & McDonough (2000) と同じ方法で実施した。処遇はこまめであるが、最後に、参加者からのタスクの質問に答えたり、学習のアドバイスを行うなど、教育的配慮を示してセッションを終えた。

2.2 ストーリーナレーションタスク

ストーリーナレーションタスクとは、物語を素材とし、10 コマほどの絵に英語および日本語で物語が併記してあるもので、日本語文を音読する中で空欄を補ったり選択肢に答えることをタスクとしたものである。

2 種類のタスクのうち、タスク 1 は、「さるかに合戦」を使用し、絵の中に 10 か所、対象言語項目である助詞について、3 択で適切なものを選ぶ問いを設けた。さらに、個々の設問で回答した直後にどうしてそれが正しいと思ったかを口頭で説明することを求め、そして音読を継続することとした。このタスクは、参加者が対象言語項目の使用について、どのようなメタ言語で理解しているかの手がかりを得るために行った。

タスク 2 は、「舌切すずめ」を使用した。10 コマの絵に英日併記の物語文が書かれており、そのうちの日本語文 34 文について、助詞の部分に空欄を設け、日本語文を音読しながら産出することを求めた。語彙は注を設けた。

タスク 1・2 とも、はじめに絵と英語を用いて参加者にストーリーを理解してもらい、その後、日本語文の音読を行ってもらった。どちらのタスクでも、「明示的な知識」（知っている知識）ではなく、「暗示的な知識」（直観的にアクセスでき使える知識）を用いて行うことを求めるために、「これはストーリーナレーション（読み聞かせ）の練習なので、設問の箇所でも立ち止まらずにできるだけ瞬時に答えて流暢に続けるようにしてください。直観を大切にしてください」という教示を行い、時間をかけて考えないように誘導した。

2.3 対象とする言語項目

タスク 1 および 2 に含めた言語項目は、菅生 (2010a,b) を受け、中級学習者でも誤りやすい用法の助詞とした。「位置詞＋（で）＋活動動詞」、「～を出す、～に出る、～から出る」、「～が入っている、～に入る」、「持ち主受け身の身体の部分を示す「を」」、「複文中の主語を示す「が」」などである。

2.4 リキャストおよびメタ言語フィードバックの操作上の定義

リキャストの長さや与えるタイミングは、リキャストの気づかれやすさに関係があることが指摘され、短く、修正の数が少ないリキャストが気づかれやすいとされる(Egi,2007)。本調査では「誤りの助詞を含む句のみ」の短いリキャストを与えた。

メタ言語フィードバックは、「place marker of the activity verb」のように、文法用語を使って助詞の選択に関わる文法ルールを示した。

34問からなるタスクのうち、前半と後半でフィードバックの手法を変え、1人の対象者に対してリキャストとメタ言語フィードバックの両方を行った。参加者11名のうち、5名はタスクの前半でリキャスト・後半でメタ言語フィードバックを与え、6名はその逆の順番でフィードバックを与えた。

3. 調査結果

本報告書執筆現在、文字起こしやコーディングなどの作業中であるため、結果を量的に示すことができない。そこで、対象とした助詞のうち、「位置詞＋(で)＋活動動詞」の発話例を紹介し、予測される傾向を示す。タスク1、タスク2について述べた後、研究課題に対する結果をまとめる。

3.1 タスク1 (メタ言語知識の言語化) について

「位置詞＋(で)＋活動動詞」の場合、よく指摘されるのは、「テーブルの上に本があります」のように「～の上/下/中/に」という文型を教科書で扱うので、位置詞と助詞「に」を「かたまり」(chunk)として覚えており、「で」が使えないということである。そこで、タスク1では、4箇所を対象者の助詞の選択と学習者に内在したルールを探った。「サルは木の上で柿を食べていた」「カニは木の下で待っていた」「カニはいろいろのそばで休んでいた」、および「屋根の上で臼がサルを待っていた」である。

その結果、「動詞が「食べる」だから助詞は「で」である」というのは正答者が最も多かった。それに対して、「待つ」では、「カニは木の下でがまんよく待っていました」と「屋根の上で臼はサルを待っていました」では正答率が異なった。前者のカニの例では、「actionだから「で」です」というコメントと共に正答を選んでいても、後者の「屋根の上で臼は～」の例では、「に」が選択された割合が高くなった。臼の行動が静的なイメージを与えたからか、同じ対象者が前半を「で」、後半を「に」を選んでいいることもあった。

「いろいろのそばで休む」は、この4題の中では一番正答率が低かった。「そばに」をよく聞くからとか「休む」はそこにいるだけだから、という理由で、「食べる」や「待つ」で「で」を選んでいても、ここで「に」を選んでいいる参加者もいた。

事例として、上述の4題における参加者Vの回答および回答理由の口述(【 】で示す)を紹介する。

- ・「木の上で食べる」：(「で」を選択)。

【I think it's 木の上で、because it's the location he is eating, but I think に could be okay, too. I am not positive.】

- ・「木の下で待つ」：(「に」を選択)。

【Same reason, probably に or で、but に sound better maybe.】

- ・「いろいろのそばで休む」：(「に」を選択)。

【I think そば usually takes に、but I am not positive.】

- ・「屋根の上で待つ」：(「に」を選択)。

【I think うえに is correct because I think うえ usually has に.】

この例を見る限り、参加者Vは4題中1題しか正答しておらず言語化できたメタ言語知識は不確実なものに思われる。この対象者がタスク2においてどうであったかを紹介する。

3.2 タスク2 (リキャスト・メタ言語フィードバックの処遇) について

以下に、「位置詞＋(で)＋活動動詞」のタスクにおける発話例、および刺激回想コメントの事例を記す。参加者Vは、タスク前半でメタ言語フィードバックを、後半でリキャストを受けた。1)はタスク開始後、この項目としてはじめてメタ言語フィードバックを受けた時の発話および刺激回想コメントである。

- 1) 参加者V：すずめは、テーブルの上に遊んでいました。＜下線部誤り＞

調査者：遊びます is an activity verb so what is the particle marking the place?

＜メタ言語フィードバック＞

参加者V：すずめは、テーブルの上で遊んでいました。＜修正＞

- * 刺激回想コメント：In those programs which I used for a while with Japanese, they have a lots of 「テーブルの上に」 sentences, which I hear over and over and over again, so I always think 「テーブルの上に」 without regard for what else will happen in sentences.

参加者Vはさらに3度、この項目で誤りメタ言語フィードバックを受け、1)と同様のコメントをしている。2)は、タスクの後半で、調査者が誤りに対するフィードバックをリキャストに変えてからも、この項目で誤ったところである。

2) 参加者 V：おばあさんは、すずめの家の前に、言いました。<下線部誤り>

調査者：家の前で、<リキャスト>

参加者 V：家の前で、言いました。<修正>

* 刺激回想コメント：yeah, so. まえに is something I hear more often than まえで, so…

参加者 V は、このリキャストの際にメタ言語フィードバックと同様、「これまで多く受けていたインプットの影響で間違えてしまった」と、誤りの原因を特定している。参加者 V は、この誤りの後、この項目の最後の問題で、正答している。

タスク 1 において参加者 V が言語化したメタ言語知識のうち、「位置詞＋(で)＋活動動詞」の助詞選択については、4 題中「木の上で食べる」以外は誤っており、不確かであった。そこにメタ言語フィードバックおよびリキャストを受けて文法ルールの再構築を行い、正用の産出に至ったように思われる。

3.3 結果のまとめおよび考察

研究課題 1 の「リキャストとメタ言語フィードバックでは認識が異なるか」について述べる。参加者 V の例では、タスク前半のメタ言語フィードバックでも、後半のリキャストでも、自分が誤った理由を特定しており、2 種のフィードバックの認識の差はないように思われる。他の参加者では、「に」の誤りをタスクの前半ではじめて「で」とリキャストされた時、「どうして？」と返答し、刺激回想コメントでも「で」が正答である理由がわからない」と述べた例もあった。量的に分析すると、場所の「に」と「で」、のような 2 つの項目の使い分けについては、メタ言語フィードバックのほうがリキャストより文法ルールの再構築につながる可能性があるように思われる。

研究課題 2 の「リキャストとメタ言語フィードバックの認識は、学習者が現在言語化できるメタ言語知識とどのように関わるか」については、リキャストを受けた参加者が、自分でルールを発見できるかどうか、という点に、学習者が現在言語化できるメタ言語知識が反映されるように思われる。「位置詞＋(で)＋活動動詞」の例でいえば、位置詞と助詞「に」を「かたまり」(chunk)として定着させている対象者と、3.1 で述べた参加者 V のように「理由は言語化できないが、「で」である可能性も意識している」対象者とでは、リキャストあるいはメタ言語フィードバックを受けた時の認識は異なっているように思われる。

ここでは、「位置詞＋(で)＋活動動詞」の例についてみたが、「～を出る・～に出る」の場合など、他の助詞では傾向が異なるように見受けられる。「～を出る」の場合、タスク 1 で正答できず、また、出発点を表す「を」のルールについて言語化できない参加者が多かった。その場合はタスク 2 でメタ言語フィードバックを受けても、納得したという認識を示した刺激回想コメントは少なかったようである。この項目にリキャストを受けた参加者の中には、刺激回想コメントとして、「「出る」の場所は object と扱うのか」という独自の解釈をしてしまった例もあり、リキャストが効果的に働きかけてはいないようであった。一方で、「～に出る」の場合、タスク 1 で「～に出る」のルールが言語化できない参加者にも、リキャストが効果的に働きかけていたように思われる。これは、目的地や到達地点を表す「に」の用法はよく定着していたこと、文脈によって登場人物の行動の方向性が明らかだったことなどが理由であると思われる。

今後、対象とした助詞それぞれについて、「リキャストおよびメタ言語フィードバックの認識」および「言語化できるメタ言語知識との関係」を量的・質的に分析して示したい。

4. 成果報告計画および報告者の博士論文における本調査の位置

対象者数の少ない小規模のデータであることは考慮しなければならないが、言語化できるメタ言語知識によってフィードバックの認識が異なることが検証できれば、先行研究に照らし興味深い報告である。本調査結果を「言語学会」、「日本語教育国際研究大会・名古屋 2012」で発表するほか、第二言語習得研究のジャーナルにも投稿することで、成果を報告したい。

このたび実施した調査は、昨年調査から得られた仮説を検証するもので、博士論文を構成する研究の最後の調査である。博士論文は、大きくは 3 つの独立した研究に基づきそれぞれ 1 つずつの章を構成する予定である。対象とする文法の誤りが動詞(補助動詞・活用形)および助詞の場合における効果的な訂正フィードバックの手法について、学習者の明示的知識・暗示的知識との関係、言語化できる文法知識との関係、文法項目の二項対立性、文脈におけるルールの明示性などから論じ、考察する予定である。

5. 謝辞に代えて

本研究はお茶の水女子大学 文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジ

ェクト「学生海外派遣」プログラムによる平成 23 年度「学生海外調査研究」枠での助成を受けて実施した。

本調査は協定校であるヴァッサー大学の理解と協力があってはじめて実施できたものである。今回も昨年同様、**Research Proposal** を事前に提出して学内倫理委員会の審査を受け、許諾を得て実施した。加えて、今回は学科長のご高配により、正式な **Visiting Researcher** として受け入れていただき、様々な便宜を図っていただいた。このことに感謝すると同時に、海外で研究者として調査を遂行することに伴う責任も実感し、身の引き締まる思いで調査にあたった 12 日間であった。同校日本学科のドラージ土屋浩美学科長および教員の皆様にはここに謹んで謝意を表したい。

参考文献

- 菅生早千江(2011a)「中級日本語学習者の助詞と動詞の誤りに対するリキャストの認識－刺激回想インタビューの分析を通して－」『2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, 172-177.
- 菅生早千江(2011b)「複数の誤りを 1 つのリキャストで訂正したときの中級日本語学習者の認識－刺激回想インタビューの分析を通して－」『言語学会第 13 回年次国際大会予稿集』153-154.
- 菅生早千江(2008)「受益表現の誤用と訂正フィードバックに対する中上級日本語学習者の反応－リキャストと自己訂正を促す介入の比較－」『日本語教育』139, 日本語教育学会, 52-61.
- Egi, T.(2010) Uptake, modified output, and learner perceptions of recasts: Learner responses as language awareness. *The Modern Language Journal*, 94,1-21.
- Egi, T. (2007) Interpreting recasts as linguistic evidence:The role of linguistic target, length, and degree of change. *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 511-537.
- Mackey, A., Gass, S. and McDonough, K. (2000) How do learners perceive interactional feedback? *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 471-497.

すごう さちえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻

指導教員によるコメント

本報告におけるデータは分析中であり、実証に基づく知見の報告になっているとは言えませんが、サンプル数の少ない小規模データであっても、いくつか興味深い傾向が見られていると思います。

「おばあさんは、すずめの家の前に言いました」のような助詞「に」と「で」の誤りは、第二言語習得研究の領域ではよく研究されている対象ですが、訂正フィードバックの対象とした研究は報告者の一連の研究以外にはありません。リキャストとメタ言語フィードバックでは、メタ言語フィードバックの方が学習者の内在化したルールを再構築するのではないかという報告は、興味深いものです。それが対象者の言語化できるメタ言語的知識のレベルに関わるかどうかという点、加えて、他の用法の助詞における 2 種類のフィードバックの認識はどうであったか、正規の報告を待ちたいと思います。これらについてすみやかに分析を進め、論文として投稿することでこの分野に知見を報告し、博士論文を上梓するべく研究を進めるよう期待します。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・森山新)